

アンメディカルフォース 戦闘日誌

まにふいくみやほか Fukapon

「アンメディカルフォース諸君、本日の任務を伝える！」

威勢よく現れた女子生徒が、開口一番に張り上げた。

彼女を迎えるオレンジ色の教室には、机越しに向かい合う男女。二人は大声に驚くこともなく、ぺたんこの胸を張る少女を溜息混じりで見つめていた。

「その痛々しい名前、まだ続けるのか？」

「うん、ちよつと恥ずかしいよ……」

大方諦めた口調ながら、今一度と意見する二人に、彼女は今日も譲らない。

「アンメディカルフォースはアンメディカルフォースよ。それとも『保健室喫茶部』の方がいいって言うの？」

ツカツカと二人の方へと歩みながら、相変わらずの大音量で主張している。

「恥ずかしさ的には、喫茶部の方がマシだよな？」

少年は迫り来るちびっ子から視線を外し、再び、目の前の少女と見つめ合う。

「うん、そうだよ……」

拳一つ高いところから視線を絡ませて、少女は少年に同意した。

「ちよつとそこっ、何いちやついてんのよっ。はいはい、今日の説明いくわよっ」

二人の元へと到着した彼女は、ギーッと近場の椅子を引き寄せ、どっかと座り。三人が三角形を描くよう、一つの机を囲んだ。

「さてと、喜びなさい。今日のはカラッと楽しそうよ」

嬉々として切り出した彼女は、朝霞夏希。見た目から物言いまで、徹頭徹尾活発な少女。

「……この前のは、ちよつとね」

「結婚指輪を探して欲しいって、よく生徒に言えるよな」

応じた彼女、三郷冬愛は、若い血が滾る高等学校において主張し放題であろう身体とは裏腹に、線の細い、奥手な話し方だ。

そして彼女に同意するよう、言葉を続けたのは黒一点、秋津拓郎。冬愛と拓郎は見た目通りの関係らしく、今も「ねー」と視線で同意を絡ませて、バカッブルぶりを発揮していた。

「まあ、生徒じゃなくてハルちゃんを経由したわけで。今回もハルちゃんだからこそ受けられた依頼だよ」

「今度は婚約指輪探しか？」

前回の苦勞のせいでいちいち突っかかっているのだと、夏希も骨身にしみてわかっている。故にここはざらりと流して、パンと目の前の机を叩き立ち上がった。

「今回の依頼は我々が得意とする色恋沙汰よ！」

「……我々？」

夏希は引き続き、拓郎の突っ込みを流し……きれず。

「そこうるさい。彼氏彼女の有無で色恋の得意不得意は決まららないの」

ツンと言いつ返すと、夏希は説明を続けた。

「気を取り直して。二人とも、松戸先生って知ってる？」

——こくり

「うん、知ってるよ。保健室によく来る先生でしょう？ 一緒に数学教えてるもん」

「だよな。三年の数学担当だろ？」

またもや彼女に同意するように拓郎は続けた。

先ほどまでの夏希と拓郎のやりとりを鑑みるに、二人はおそろしく、もつとテンポよく話せるのだろう。率直に言えば、冬愛の反応は間が悪い。それでも冬愛が先に口を開くことがごく自然なのは、やはり二人の間柄がなせる技であろうか。

二人のやりとりを待つ夏希も、先を急がず、慣れた様子で接している。

「そう、その松戸先生から。掻い摘んで言うと『人生初デートにある人を誘いたいんだけど、女の子と二人きりになったことがなくて怖いから何とかして』とゆうご相談」

言ってみればあっさりしたものだ和我ながら満足したように、夏希は再び腰を下ろしている。

その間にまた一呼吸置いて、細い声が返された。

「何とかって……。私たちに何とかできるの?」

「さすが冬愛、鋭いわね。その質問を待っていたの」

「いや、普通疑問に思うだろ」

「拓郎うるさい」

根拠のわからぬ自信に溢れていた夏希は、つい突っ込んでしまったらしい拓郎を一蹴し、ここで二人が予期せぬ行動に出た。

彼女はすつと立ち上がると、こともなげに言う。

「冬愛、ちよつと来て」

「……え? 私?」

「うん」

虚を突かれ己を見上げる冬愛を確認しながら、彼女はさらに、筋書き通りの注意を放つ。

「あー、冬愛一人よ。おまけはいらないから」

案の定、冬愛よりも先に立ち上がるうとしていた拓郎を制する。

すると肝心の冬愛は、彼女の制止に舌打ちでもしそうな彼を不安げに見つめるばかりだ。

「大丈夫よ。だいたい、あんたと付き合う前は私といった時間の方が長いよ?」

彼女はここまでを含んでいたであろう流れのよさで拓郎を説得すると、彼も納得したのか、小さく頷く。さらには一呼吸置くと、冬愛がたおやかに立ち上がった。

夏希・冬愛密談の内容はむろん拓郎に知らされぬまま、三人は保健室へと向かっていた。

「何? 気になるの?」

にやにやと夏希が拓郎をからかっている。

「気になる」

拓郎にとって、夏希のこの程度の行動は日常茶飯事。それこそ十数年も前から繰り返されてきたことだ。しかし冬愛の表情はどうか。知り合って一年半とは言え、初めて見る表情だ。

「ははあん、笑いをこらえる冬愛ちゃんが気になるのね?」

「ああ、わかってる。俺が心配になるよう吹き込んだってことはわかってる。それでも心配なんだから仕方ないだろ」

拓郎は拗ねたように言うと、一歩前を歩き、保健室の扉を開けようとしていた。

一方の夏希はあえて歩みを抑え、冬愛と並ぶ。

「いい彼氏じゃない?」

「うん、優しいんだよ。……夏希みたいに」

「——そう」

冬愛のまさかの反撃に、夏希は参ったと苦笑いした。

そんな三人が揃うと、保健室の扉は開けられた。

「失礼します」

——ガラガラ……

引き戸を開けると、ティーポット片手の白衣姿が振り返った。

「いらっしやい、喫茶部のお三方」

「違あう！ アンメディカルフォース！」

「んー、それ、カッコ悪いぞ？」

「キシヤーツ。単なるお茶飲み会だと思われる方がカッコ悪いです！」

じゃれ合う二人を横目に、冬愛と拓郎はティーカップの並べられた小さなテーブルに着いた。

「ハルちゃん、松戸先生は？」

「ああ、もうすぐ来る。職員会議があと……ああ、もう終わる時間だ」

ハルちゃんと呼ばれる女性、保健室の主たる船橋春枝ふなばしはるえは一七時ちようどを指す時計を見て、自らも椅子に腰掛けた。

「済まんな、拓郎」

「えっ？ なんで俺に謝るんですか？」

四人が円卓に揃った途端発せられた春枝の科白に、拓郎は困惑せざるを得ない。今回の依頼が厄介なことは確かだろうが、拓郎だけに謝る理由にはならないだろう。

「がんばれオトコノコ、ってことだ」

「はあ……」

腑に落ちず紅茶に手を着けようとすると、冬愛が一人、クスクスと笑っているのが彼の目に入った。

「冬愛、何か隠してるんだろ？」

膨れっ面を作り問い詰める拓郎に、冬愛は全くもって無防備だった。

「あのね——」

しかし、周りの守りはそう甘くない。

「ちよつと待ったあ、ダメでしょうが冬愛、黙ってなきや」

「あ、そうだね、ごめん」

「まー、すぐにわかるから待ってる」

女性陣三名はみなにやけ顔で、ティーカップを手に取った。もはや怪しいとしか言いようのない状況だったが、言われたとおり待つほかないかと拓郎は諦め、紅茶を一口飲んだ。

彼女たちが始めたとりとめのない話は長く続くことなく、程なくして待ち人は現れた。

「失礼します……」

保健室というのは独特の雰囲気があるもので、生徒だけでなく、教員であっても丁寧な挨拶とともに入るのが通例になっている。しかし入ってしまったら校内で最も砕けた場所なのは、春枝の人柄によるところだろう。

「いらっしやい。さ、座って」

「済みません……」

言葉以上に申し訳なさそうな顔でテーブルに加わったのは、松戸先生こと松戸英治まつどへいじ。保健室ではお馴染みの顔が座ったのを確認すると、春枝が説明を始めた。

「概ねは伝えておいた。松戸先生の口から説明して欲しいのは相手が誰かってことくらいだ」

年上の教員相手にタメ口を利けるのは、校内広しと言えど彼女ぐらいものだろう。尤も、春枝に対しては例外だが。

「はいはい、ハルちゃん、教えてー」

夏希が礼儀を軽視しているというわけではなく、春枝自身の指導によるものだ。そんな彼女だからこそ、こんな話ができるのかも知れない。

「んー？ 何だ、夏希」

「松戸先生は女性と二人っきりになったことがないってホント？」

「お前なあ……」

呆れかえる春枝を見て、拓郎が苦笑いをしながら耳打ちした。

「それを聞いたら悪いだろ」

しかし春枝の意図はそこになかったらしい。

「いや、そんなことはないぞ。ただ、それは私じゃなくて松戸先生に聞けってことだ」

あっけらかんと言う春枝の前に、いたたまれない状況の松戸。

あまりに悲惨な状況に、冬愛などは言葉の口にするものもなく、そのいたわしさに心の中で謝っていたほどだ。

(……松戸先生、ごめんなさい)

それでも、あえて、もしくは何も考えずお構いなしなのが、春枝と夏希。

「で、ホントなんですか？ 松戸先生」

「ま、まあ……」

「ふう、私とはよく二人きりで話すんだけどね。船橋春枝は女でない」と

「うあー、なんか血生臭い展開になってきた！」

「いや、あの、そういうつもりは……」

……きつと「あえて」なのだろう。冬愛と拓郎はそう信じて、

しかしどこか他人のふりをして紅茶を飲んでた。

春枝は女性なのか談義でひとしきり盛り上がりになると、話は戻ってきた。

「ハルちゃん以外の女性と二人きりになったことがないのはわかりました」

「松戸先生が私のベットみたいな言い方だな」

「そ、そうだったのか。とゆーのはさておき、本題に戻ってお相手は誰なんですか？」

会談の開始から十分、改めて、夏希がザックリと切り出した。

「……ふちゅうせんせい、です」

「あの一、『ふちゅうせんせい』って、府中先生？ 英語の？」

「はい……」

松戸の言葉に一同沈黙。

その意味は、マイペースで口を開いた冬愛が語ってくれた。

「府中先生、お綺麗ですものね……」

「まあ、そうだな。うちの学校で美人と言えば、府中先生か冬愛か」

「そりゃそうよ、校内でたった二人の姫カット、黒髪のお姫様だもん」

「あの、私のことは……」

何やら妙な盛り上がりを見せている女性陣。いつもだったら冷静な冬愛も、渦中の人として動転しているようだ。

拓郎は仕方ないなど三人をよそに、困惑する松戸に話しかけた。

「偉そうな話で済みませんが、俺たちにできるのは、府中先生を誘う勇気を持ってもらう程度のことですよ？」

「はい、それでも十分です……。私一人ではどうにも、声もかけ

られなくて……」

「今日何度目か、またうなだれる松戸に拓郎は淡々と問う。

「話したことはあるんですか?」

「多少は……。ほとんどないと言った方がいいかも知れません」

「そうですか……。でも、考えようによつては、真つ白から積み上げられるつてことですから、これからがんばれば……」

「はい……」

この手の話が男二人だとも行き詰まるようで、すでに会話が途絶えている。

一方、色めいている女性陣。

「冬愛は初心者向きよね。ふんわりとした性格、女の子らしいスタイル、背の高さも手伝つて薰る優しいお姉さんっぽさ。彼氏付きじゃなかったら今頃大変だったろうねえ」

「ふうむ、それに比べて府中先生はなあ。あのきつつい性格でつるべただからなあ。玄人向きと言うか、変態向きと言うか……」

「そんなことありません。府中先生はとても優しいんですよ?」

「確かに冬愛といるときは和やかだなあ。それ以外常にツンツンしてるんだけど」

一向に止む気配がないことに拓郎は痺れを切らし、口を挟んだ。

「あの一、松戸先生が困ってますよー」

他人を引き合いに出すあたり、おっかなびつくりではあるが。

彼の声に、三人はハツとしたのか、パタリと話が止まり。

「えー、それでは本題に戻つて。府中奏対策会議かなでを始めたいと思えます」

夏希がビシッと仕切る。

「我々は即効性のあるプランを提案します」

「我々つて……」

凜と語り始めた夏希に、拓郎はいつも通りの指摘を挟んだが、

彼女は意にも介さない。

「今日、ある女子生徒と軽くデートしてもらいます。その経験を踏まえ、明日、府中先生を誘つて、同じようにデートするというプランです」

「明日、府中先生は空いているのか?」

懲りずに甘さを指摘する拓郎に、意外にも冬愛が答えた。

「うん、多分……。府中先生、家に帰つたあと、時間を持て余してるつて言つた。だから最近ピアノを初めて、練習するようになつたんだつて」

彼女の答えも、彼女がそれを知っていることも四人にとつては意外で、春枝などはあからさまに感心している。

「それは私も知らなかつたなあ。多分、知つてるのは冬愛だけじゃないか?」

「どうでしょうか……」

「恐るべし、姫カット連合」

「そんなんじゃないよ……」

褒められていのか持ち上げられているのか、とにかく注目の的となつてしまった冬愛は頬を赤らめて否定している。

こうしてまた脱線していた場を、今度は夏希が元に戻した。

「はいはい、その辺にして。松戸先生、このプランに異存はありませんか?」

相変わらず自信に溢れた彼女の提案が、松戸を直撃。

周囲のものはここで弱々しい答えが返ってくるのだろうと直感したが、部屋に響いたのは力強い声だった。

「はい、お願いします」

迷いでもあろうものなら一喝してやろうと思っていた夏希も満足したようで、曰く「対府中奏デパート演習」が始まる。

「松戸先生は帰る支度して校門で待っててください。冬愛と拓郎はこっち。ハルちゃん、ベッド借りるよ」

夏希の指示でみなぎ動き出す。

拓郎も指示通り、ベッドの方へと向かった。しかし彼には一つ、解せないことがあった。なぜ冬愛が、顔を赤らめているのだろう。

§

十数分後、校門前ではブラン通り、松戸とデートの練習相手らしき女子生徒が立っていた。

「我ながら完璧よね。練習相手にこれ以上の人材がいて？」

「うむ、正直この発想はなかった。喫茶部部长、さすがだな」

「アンメディカルフォース！」

「おお、すまんすまん。しかしこれは本当に凄いな、ベストチョイスとはこのことだな」

春枝が舐め回すように観察しているのは、見慣れた制服、黒のセーラー服を着た少女。

「でしょう？ 府中先生とびつたり同じ身長、見紛うばかりのぺつたんこな身体」

「しかも姫カットで万全だな」

彼女は評されているとおり、身体においては女性らしさが若干欠けた感じの少女だった。

「しかし一つだけ、不足がございましてねえ」

「ああ、わかってる。この子はなんでこんなに女の子っぽいんだ？」

「そこですよ。そればかりは私にも……。デートを前にして露骨に恥ずかしがるなんて、府中先生のキャラじゃありませんよねえ」

府中も相当な言われようだが、今この場において、怒り心頭を通り越し、顔を真っ赤にしているものは別にあつた。それが練習相手の彼女。

「なんで俺がこんな格好しなきゃなんねえんだよっ！」

「あーダメダメ、府中先生の言葉遣いはもっと綺麗だよね？ 冬愛」

夏希は少女の怒りをあしらいながら冬愛に話を振ると、こちらも顔が真っ赤にしている。

「……う、うん」

視線を地に落としていた彼女が身に纏っているのは、見慣れた制服、黒の学ラン。

つまり。

「男の娘仕様の拓郎、予想を遙かに上回る可愛さだなあ」

そういうこと、少女の正体はセーラー服を着せられ、ウィッグを被せられた拓郎だった。

「可愛いつて言われても嬉しくありませんから」

「この拗ねた感じがまたいいでしょう？ なんだかんだ言つて嬉しいんですよ、拓郎ってば」

もはや夏希のオモチャと化していることに疑う余地もなく、何を言おうと無駄な情勢だ。それでも男、秋津拓郎としては食い下がりしたい気持ちがあるらしい。

「嬉しくなんか——」

「嬉しいよねえ。愛しの冬愛の制服だもんねえ。くんかくんかして押っ勃てちゃダメだぞ?」

「誰がそんな——」

しかも夏希には、勝算を超えた勝利の確信があった。冬愛を味方にしてはいる。

「……私の制服、嫌?」

「嫌なわけではないよなあ? そりやもう、今すぐにもむしやぶりつきたいくらい?」

「うう……」

冬愛が本当に涙目になっていて、拓郎はもう、何も言えない。無理矢理ながらこれで落ち着いたと、夏希は高らかに宣言した。

「それではこれより、対府中奏デート演習を開始する。春枝曹長、松戸二等兵にデートプランを指示したまえ」

「アイ・サー。というわけでこれがデートプラン」

乗り乗りの夏希に感化され、少々芝居がかった春枝は一枚のメモ用紙を取り出す。そして松戸に、内容の説明を始めた。

「放課後の短い時間だし、一緒に歩いて食事に行つて、帰りの電車に乗るのを見送る。それだけ。簡単でしょう?」

「は、はい……」

松戸の方とは言えば、早くも緊張でガチガチ。いきなり女性と二人きりは厳しかろうと男の娘を配備したのだが、それでも限界に近いように見える。

しかし春枝は容赦がないのか、淡々と説明を続けている。

「大丈夫よ。特別な何かをするわけじゃないんだから。食事は駅向こうのイタリアンレストラン、松戸先生の名前で予約済み」

「はい……」

「場所はわかる?」

「はい、わかります……」

「おーけー。じゃ、がんばつて。今日はたくさん失敗しよう。そうすれば明日はうまくいくから」

気のない返事連発の松戸に対して、春枝は養護教諭らしく、それなりに勇気づけている。締めくくりは、この一言だ。

「なあに、相手は男の娘だ。怖いことないぞ?」

さすがの夏希もこの言葉には少々疑問を感じたが、細かいことは気にせず、声を飛ばした。

「進軍開始!」

同時に、松戸と拓郎（男の娘仕様）は校外へと出て行った。

二人の後ろ姿はなかなか様になっている。拓郎の身長が低めなおかげで、二人並べるとしっかり男女に見えたりもする。

しかし、そんなカッブルを見た直後、俄に深刻な顔で二人に向き直ったのは夏希だ。

「相手がセーラー服なのに『府中先生』って呼ばせるのまづくない? いきなりコスプレデートとかレベル高いよね?」

鋭い洞察に冬愛も春枝も、極めて真剣な表情で応じた。冬愛曰く。

「明日、府中先生にも制服を着てもらえばいいんじゃないかな」
対して二人は。

「案外、冬愛の頼みなら聞いてくれるのかも知れないな」

「いや、だから、それはレベルが高すぎやしないかと……」

面持ちとギャップの大きい内容に結局三人とも笑い出す。

「そうだよなー、いきなりコスプレはヤバいって」

「でも、初めてがそれなら馴染んじゃうんじゃない?」

人気のない、日の暮れた校門に笑い声を残しながら、三人は先
 行する二人のあとを追った。

「あ、あの」

「はい……」

演習中の二人はひどくぎこちなかった。歩き出してもう十分は
 経過しようとしていたが、会話らしい会話は一度も成り立ってい
 ない有様。

松戸の方は緊張故仕方ないが、拓郎がパツとしないのは尾行十
 携帯で音声モニタ中の後続三名にとつても不思議なところだっ
 た。

春枝は心配になり、冬愛に確認してしまうほどだ。

「拓郎とのデートって、いつもあんななのか？」

「い、いえ、そんなことは……。普通に話してます……」

「だよなあ」

春枝も冬愛もますます不思議を深めていたが、夏希は当然のよ
 うに気付いていた。

（こういうところは私が一番常識的ね。女の子としてどうすれば
 いいのか、わからないだけでしょ）

そして事態を打開すべく行動を起こす。

「私、先にレストラン行くね。あとはよろしく」

夏希はそう言うと、軽く走りながら去っていった。

ついに会話を試みる努力すら失った二人がレストランに着い
 た直後、彼女の予想は大当たりで、拓郎を捕まえることに成功し
 た。

「こら拓郎、そっちじゃないでしょ？」

「うああつ、夏希、いつからそんなところに……」

間が持たないを積み重ねてこまで来たら、ひとまず一人にな
 れるところに逃げ込むだろうと、彼女はトイレの前で待ち構えて
 いたのである。

「ほら、いいから。こっち来なさい」

「えっ、おい、そっちは——」

「大きい声出さないの。その格好で男子トイレ入ったら変態よ？」

「女子トイレはバレたら変態じゃ済まないだろ」

「いいからっ」

夏希は拓郎のセーラーカラーを引っ張り、女子トイレへと、個
 室の中へと引き入れた。

「あのさあ、恥ずかしいのはわかるけど、この際割り切って演技
 できないの？」

後ろ手に鍵をかけると、夏希の説教が始まった。

とは言え、頭ごなしに怒られるかと思っていた拓郎にとつては
 意外で、つい相談してしまうこととなる。

「恥ずかしいのもそうだけど、何をしゃべったらいいかわからな
 くて……」

「あのねえ、即席の女の子もどきに、女の子の会話なんか期待し
 てないって」

「え？ いいのか？」

返ってきた答えにきよんとする拓郎に、夏希は極めて落ち着
 いた口調で続けた。

「いいの。だいたい、初めて食事する相手との会話に女も男もあ
 るかっつーの。ましてやあのツンツンが女の子っぽいこと言うわ
 けないでしょ」

「それはさすがに言い過ぎじゃ……。でも、それじゃ何を話せばいいんだよ？」

「普通に話さないよ。彼女いるんだから、その話でもしてやれば？」

「いや、でも……」

「拓郎も言ってたでしょ？ 『勇気を持ってもらおう』だけなのよ。要は『これだけやったから大丈夫だ』って思い込ませるのが今日の狙い。おーけー？」

「あ、ああ。……夏希、案外考えてるんだな」

「案外は余計。とっとと行きなさい」

「はい。がんばってきます」

カチャンと開放した扉から、拓郎は夏希とすれ違うように出て行った。

「つたく、これくらいうまくやれての。トイレで二人きりでも緊張しないくせに……」

夏希は一人きりになった個室から出ると、重たい疲れを感じながら、冬愛と春枝の待つ席へと向かった。

その後の演習はすこぶる順調で、二時間の食事も終了し、今から駅でお見送りだ。

「夏希がトイレに引きずり込んでから完璧だな。いったい何をしたんだ？」

「別に何も。単に今日の目的を叩き込んでやっただけです」

二人を見守る夏希の顔色が少々優れないことに春枝は気付いて、少し、余計なお節介を焼いた。

「冬愛制服に興奮した彼をお口で慰めちゃいました、と」

待っていた電車がちょうどホームへと入ってきたとき、彼女は

とんでもないことを言っていた。

「ちよ、何言ってるんですかつ。そんなことするはず——」

「ないよねー。わかってるって」

春枝の冗談に夏希が苦笑を返した頃、姫カットのぺたんこ少女は電車へと吸い込まれていった。

その後電車が走り去ると、三人は松戸の元に歩み寄る。

「どうでした？」

夏希は笑顔を作って彼を迎えると、三人にとっては最高の報酬を受け取った。

「ええ、おかげさまで。誘える気がしてきました」

彼の言葉に一同、笑みを深めた。

しかし彼女たちの一日は、まだ終わらない。

「あの……」

「どしたの？ 冬愛」

「『お口で慰める』ってどういうこと……?」

夏希と春枝はもうしばらく、苦慮が続くことになる。

§

翌々日の土曜日、朝早くからお茶が並べられていた。

「おはよ。みんな早いな」

紅茶の香りがする保健室に、最後に現れたのは春枝だ。

対して先着していた三人は、三様の挨拶を返した。

「おはよーハルちゃん」

「おはよーございます」

「おはよーございます」

不運にも彼らの高校は週休一日。土曜日は半ドンながら授業がある。

まさに「不運にも」であり、いつもなら疲れ切った顔をしていることも少なくない四人だったが、今日はひと味違った。みな、理由は一つである。

「夏希のところに連絡はなかったのか？」

「なかったんですよ。あれほどメールしろって言っておいたのに」

春枝はスーツのジャケットから白衣に着替えながら、ステータスを確認する。

「どーなってんだ？ 確かに二人で出て行ったんだけどな」

「ですよええ。あれには感心しました」

拓郎はティーカップに牛乳をたっぷり注ぎ込みながら答える。

「緊張がなせる技ね。普通、生徒にバレるとか考えるだろうに」

夏希は輪切りのレモンを二枚、三枚と放り込んでいる。

「ま、その件については保留しておこう」

白衣を着て養護教諭らしい姿に決めた春枝は、三人の待つお茶会に加わった。

「しかし何だ、朝から紅茶ってのは優雅でいいな」

「よろしければ、毎朝参りましょうか？」

「それは魅力的な提案だなあ」

朝から穏やかに振る舞う冬愛を見て、一層優雅な気分浸っていると、待ち人來たるの音がした。

「失礼します……」

「うしし、來た來た」

途端、夏希は下品な笑みで歓迎している。

他のみなも、一様に笑顔だ。

引き戸が開いて入ってきたのは、予想通り、松戸。

「いらっしや——っ!？」

しかしみなは驚くこととなった。息をのんだ夏希だけでなく、一様に目を見開いている。

にやけ顔を出迎えるつもりが、そこには眼が真っ赤で目の下にはクマという正反対の顔が現れたのだ。

「ど、どうしたんですかっ?」

哑然としそうになった己を叩き起こし、夏希は問うた。

むろんすぐには返ってこなかったが、突っ立ったままの松戸の口から、程なくして訥々と語られた。

「おかげでうまく誘えて、食事もして、見送るまではよかったです」

「おお、完璧じゃないですか。それで?」

誰もが完璧なんかじゃないことはわかっていたが、今は、夏希の言葉選びが最善のように思える。無理に明るく促す彼女の気持ちは、みなの気持ちであった。

「そのとき、言われたんです。『昨日、駅前を女性と歩いてましたよね』って」

——しまった!

どうして気付かなかったのだろう。

話を聞いて歯噛みをした。レストランこそ多少離れるものの、デートコースは概ね通学路。電車通勤の先生にしてみれば通勤路だ。見られる可能性はいくらでもあった。

「……これはちよっと、まずいね」

苦虫を噛み潰したように、夏希は低い小声で悔やむ。

「当然のことなのに、私も全然……」

「俺も気付かなかった……」

まるで松戸から伝染していくかのように次々と表情は曇っていく。ところが、冬愛は、いつも通り穏やかな表情で言った。

「本当に、そんなに悲観すべきことでしょうか……?」

意外な科白が紡がれたとき、保健室に第六の聲がこだました。

「失礼します」

続いてお馴染みの引き戸を引く音がした後、視界に現れたのは府中だった。

さすがにこの事態は予想外どころの騒ぎでなく、松戸を含め果然とするほかない。夏希に至っては、あんぐりと口を開きっぱなしである。

「おはようございます。みなさんお揃いで、助かります」

府中はそう言うと、ツカツカと紅茶が並べられたテーブルの方へと向かってくる。その途中で。

「松戸先生。昨日はありがとうございました。楽しかったです、また誘ってくださいね?」

彼女はこともなげに言ったのだ。昨日のお礼を、しかも「また誘ってくださいね」付きで。

もはや何が何だかわからんと混乱極める保健室、その中で相変わらず、彼女は穏やかなままだった。

「おはようございます、府中先生。やっぱり、気付かれたのですね……?」

「ふふっ、さすがは三郷さん。私と同じだから? それとも彼氏がいらっしやるから?」

きつい性格で鳴らす府中が、今日も不思議と和やかに。冬愛と一緒に笑っていた。

冬愛はすっかり事態を理解したようだったが、他四名は未だに全くわかっていない。代表して今度は、春枝が切り出した。

「いったいどういふことなんだ?」

問われた冬愛がゆっくり答えようとしたところ、府中が制止して、代わりに話し出した。

「一昨日の晩、駅前で松戸先生が女性と二人きりで歩いているのを見たのは事実です」

彼女の言葉に、一同「やっぱり見られていたか」と苦い表情を崩さない。

それを見て満足したかのように、彼女は続ける。

「普通の女性だったら気にも留めませんでした、その女性が本校の制服を着ていたので、すぐに注意深く観察を始めました」

引き続きなんたる失態をと自戒の念で溢れている聴衆に対し、府中は冬愛とにっこり目を合わせて、核心へと迫る。

「教員が猥褻行為という事件も多くありますので、しばらくの間、見ていたのです。けれども正面から見るとき、おかしななっ

て」

そこでまた一息入れると、冬愛は目の前の紅茶を差し出した。

「ありがとう。いただきますね」

応じて府中は紅茶を一口飲むと、ゆっくりと机に戻した。

その間に夏希と春枝は心の中で突っ込みを入れる余裕を取り戻していた。

(悠長なことやってないでとつとと言いなさいよ!)

(いやあ、こりや一杯食わされたか。何にせよ若いのに侮れんな

あ)

しかし一方で男性二人は、硬直が解けないようだ。

彼らを見て少々哀れに思ったか、府中はそれ以上焦らすことなく、最後のフレイズを綴る。

「この学校に同じ髪型は二人しかいません。でも、松戸先生の隣にいた人は三郷さんではありませんでした。顔は化粧で変わる範囲にも見えましたが、身長が低すぎました」

そう言い終わると、彼女は再び机の上の紅茶を手に取り、悠然と飲んでいる。

「うがーっ、完全に負けましたね、こりゃ。冬愛も凄いなあ」

一方すっかりやり込められた夏希は、大声で悔しがっている。

冬愛はいつもの笑顔。悲しみのどん底にいた男性陣二人は、無言ながら安堵の表情を浮かべている。

春枝はここまで来たら全てを明らかにせんと、さらに問うた。

「府中先生は全く疑わなかったんですか？ 制服の少女と二人きりだったんですよ？」

「事情が理解できなかったので、翌日、確認しようとは思っていませんでした。けれども私が確認する前に、松戸先生からお誘いをいただいたんです。そのとき何となくわかりました」

けろりと言う府中に、春枝と夏希は神懸かったものを感じ、もう何も言えなかった。

「それでも最後に彼に言ったのは、心のどこかで疑っていたのかも知れません。反応を見たら何の心配もなくなりましたけど」

彼女の締めのお言葉を聞いて、いやはや恐ろしいと強く感じたのは、無言でいた男性陣二人である。彼らは意識の奥深くで「絶対に浮気はしません」と誓ったことだろう。

校内には予鈴が鳴り響き、朝のお茶会もそろそろ終了の時間。府中は松戸を連れて、保健室を出て行った。

残っていた三人も、片付けを追えて教室へ向かわんとしている。

「夏希、ちょっといいか？」

「え？ 私ですか？」

「ああ、冬愛と拓郎は先に行っていていいぞ」

春枝は夏希を呼び止めると、唯一残された謎を解こうとした。

「拓郎が女の子になったとき、胸、僅かにあったよな。ブラとパッド、夏希の？」

「そうですね、冬愛のを外させるわけにはいかないでしょう？」

「ああ、そこまではわかったんだが。私が依頼を出したの、あの日の放課後になってからだよな？」

「そうですね、それがどうしました？」

「……つまり制服貸す程度、大したことではないな」

「そ、それは……」

視線を外すと同時に、顔を真っ赤に染めた彼女に、春枝はつい笑ってしまう。

「まーなんだ、お互いがんばろうな」

「うー、ハルちゃんと一緒にしないでよっ！」

彼女が保健室を走り去ると、今日も一日が始まった。

あとがき

ここまで来たら新刊にしてやるぜっ！ と意気込んでいる Fukapon です。

今月は不運がございまして、ゴールデンウィークどころか土日もない事態に陥りました。姫カットの新刊があ！ってときに、直前の金土と休めることになったのは諸刃の剣とでも申しましようか。ひどい寝不足だったので書けるレベルに回復すべく眠りつつ、正味二十四時間ない中で何とか書き上げてみました。……これを書いている時点では仕上がっていませんが。

前回も同じことを言っているんですが、姫カットがいくら好きでも、私の創作物は小説なんですよね。イラストと違って、ただ姫カットキャラがいてもおもしろくないんですよ。誰も喜んでくれないわけですよ。とゆうー難しい現実が、今回も私をいじめてくれました。しかし危機的状況が何とかアイデアを授けてくれて、どうにか姫カットなお話になった、かな？ えーとPOPは「姫カットな男の娘ががんばる小説」でよろしく？

本作とは全く関係ないんですが、私、髪を伸ばしています。正確にいつからだったかは覚えていないのですが、日記をたどると二〇〇七年の冬からかな。だからもう二年半くらい伸ばしてあります。おかげでいい具合に、背中に届く長さになったのですが……。姫カットにできない！ 額が狭くて前髪ばっつんにできないんだよっ。とゆうーわけぢょっとしよんぼりな今日この頃。

もパーツウィッグとかで遊んでみようかなあとは思いますが。この前、前髪着けてみたら、髪型だけは可愛いなと思いました。髪型だけは。

さて、とっとと推敲やら何やらやらないといけないので、この辺にしましょう。次回は来週です。……えっ？ 来週？ 無理だよー。と本気で言っているのに誰も本気にしてくれないんだろうな。それでは、ばいばい。

二〇一〇年五月二三日、残作業の積まれた作業室にて。

アンメディカルフォース戦闘日誌

Fukapon

2010年5月23日 初版発行

発行所 まにふいくみやほか

印刷／製本 project KAIGO

Copyright © 2010 Fukapon <fukapon@projectkaigo.org>

<http://www.projectkaigo.org/>